

成果報告書

2019年度助成	所属機関	横浜市立白幡小学校	
役職 代表者名	校長 望月 重晴	役職 報告者名	教諭 堀口 好文
テーマ	主体的・協働的な学びを創る子どもの育成 ～子ども自ら問い、自己選択、自己決定する授業デザイン～		

※ご異動等で現職の方では成果発表が難しい場合、上記代表者または報告者による代理発表を可といたします

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

これまでの研究を通して、本校の子どもは、課題や問題を設定し、見通しをもつことができれば、協働的な学びを基盤として意欲的に解決できることが分かった。また、課題や問題を解決するために、活用できる既習事項や習得が必要な知識・技能を整理することで自主的に学ぶことが明らかになった。その結果、全国学力学習状況調査等で調査した学力、学習意識共に上昇傾向にある。

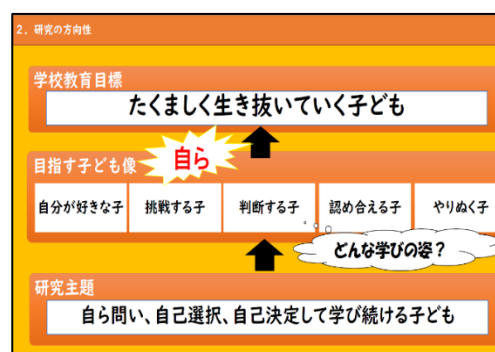
教職員で子どもの生活や学習の姿を振り返り、「目指す子ども像」を整理した。その結果、教職員が、子どもが課題を発見して取り組むための手立てを具体的にイメージしていることや、子どもが課題を解決する方法を主体的に選択、決定して学ぶ姿が見られないことに課題意識をもっていったことが分かり、それが、本校児童の学力、学習意識の上昇につながっているのではないかと考えた。また、子どもが自ら見出した課題を、他者とかわり合いながら、協働的に解決して欲しいという願いをもっていることも明らかとなった。

そこで、21世紀グローバル社会をたくましく生き抜く力を育成するために、重点研究のテーマを『子どもが自ら問いを見出し、主体的に学び方を自己選択、自己決定しながら、他者と協働的に学び続ける子どもの育成』とした。具体的には、『子どもが自ら問い、自己選択、自己決定しながら学び続ける』ためには、どのような授業デザインや教師の手立てが有効であるかということ、子どもの具体的な姿を根拠として、年間計画、単元計画、一単位時間の計画を基に検討、検証する。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

校内研究のみで、授業デザインを構想していくのではなく、職員会議（通称：シラハタ会議）を通して、子どもの実態を学年間・異学年で何度も話し合うことを繰り返し、日々のカリキュラム・マネジメントとして一単位時間の実践を行っていく。そのために、校内の会議等の年間計画を見直した。

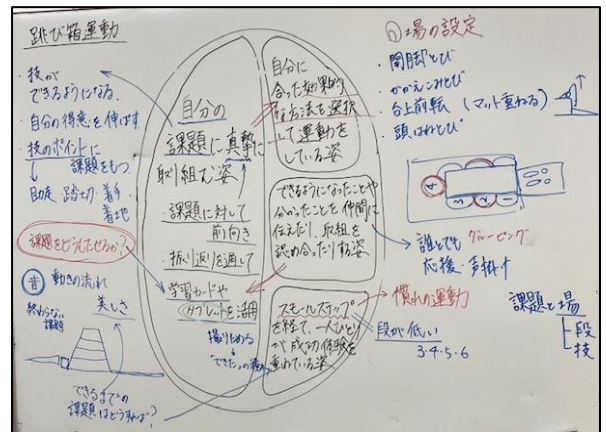
教職員で検討し、研究テーマの「自ら問い、自己選択、自己決定して学び続ける子ども」について、下の図の5つの目指す子ども像として整理された。それらは、新学習指導要領で育成すべき資質・能力の3つ柱と結びついており、「自分が好きな子」「挑戦する子」「やり抜く子」は、【学びに向かう力・人間性等】と、「判断する子」「認め合える子」は【思考力・判断力・表現力等】【知識・技能】とそれぞれ関連があると分析した。5つの子ども像について、授業実践を通して目指していくことで「たくましく生き抜く子ども」の実現に迫ることができると考えている。



3. 実践の内容

【全体性の卵の活用】 教員一人ひとりが「自分の言葉で語る」授業の構想・検討

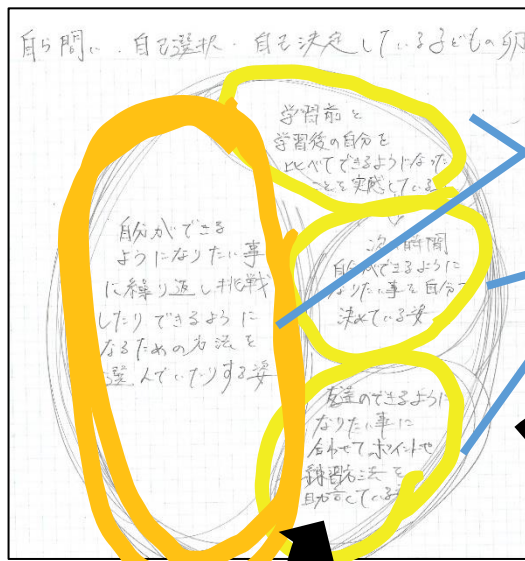
コロナ禍において、研究授業を行う回数は減少した。しかし、教職員が、研究授業から最大限に効果を得るために『全体性の卵』というツールを使った。その單元における「自ら問い・自己選択・自己決定しながら学び続ける子ども像」を具体的に想定して、黄身の部分には、クラスの子どもの実態から、授業者が単元で**一番大切にしているきたい子どもの姿**、また、**成長を期待する子どもの姿**を書く。自身に当たる部分には、主題に関連して、黄身に記入した内容の他に授業者が単元で目指す子どもの姿を書く。それらを基に授業実践・改善していくことで、手立てや活動の意味理解が深まり、より効果的な指導や支援が行えると考えた。



事前の検討会では、授業者のねらいが『全体性の卵』に可視化されていることで、視点が絞られた検討会を行うことができた。授業後の協議会においては、『全体性の卵』に記載されている授業者のねらっている子どもの姿が見られたか、また、授業者の手立ては有効だったか、について、授業での子どもの姿を基に話し合った。

教員一人ひとりの授業に対する目標や、子どもの実態により研究テーマへのアプローチが異なることを念頭に置き、授業者にとってどのような協議がされるべきなのかを考えた。

実践前の構想

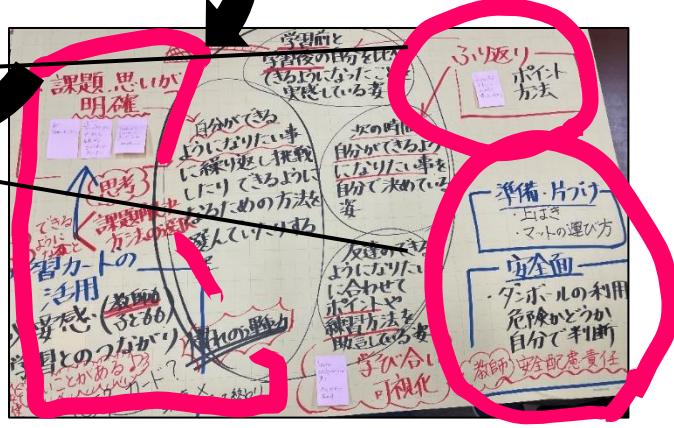


黄身
授業者が単元で一番大切にしている姿

白身
主題に関連して、他に授業者が単元で目指す子どもの姿

実践後の振り返り

卵のまわり
授業の事後でも全体性の卵を用いて、子どもの姿をもとに、手立ての検討を行っていく。教師の手立てと子どもの姿を関連させていくことで、授業力や教師の子どもの見方の質を向上させていく。



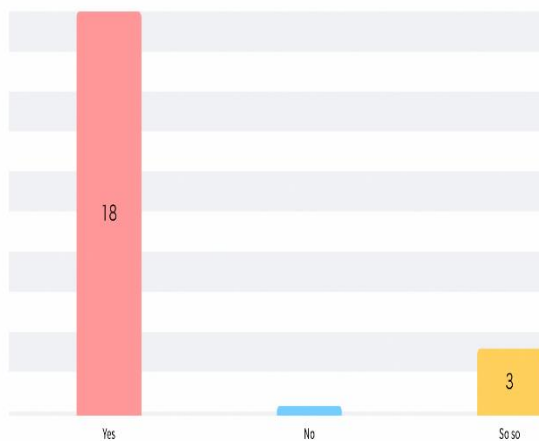
4. 実践の成果と成果の測定方法

測定方法

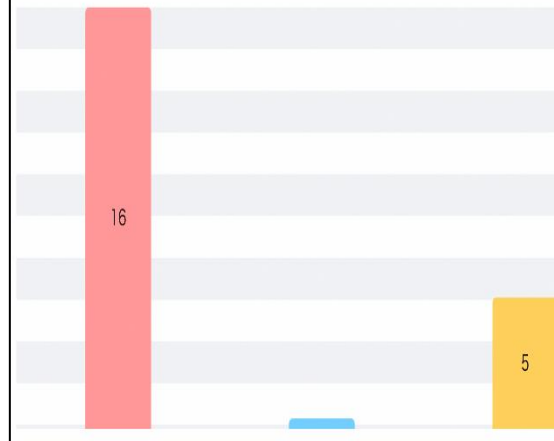
成果の測定方法は、教職員の年度末アンケートを実施。

「全体性のたまご」を活用した検討や事後研の在り方について

「全体性の卵」を活用することによって、教師が大切にしていることや子どもたちに付けたい力が明確化され、授業の方向性を定めることに有効でしたか？



「全体性の卵」を活用したことによって、子どものみとりや事後での協議を焦点化することができましたか？



教職員からの声

- 何を大切に、授業をしているのかが、一目見ただけで分かった。検討の方向が焦点化され、話し合い易い。
- 「全体性の卵」をかくことで、研究テーマや指導内容と照らし合わせ、自分がクラスの子どもたちに抱いている思いを整理することができた。
- 授業の全体と、本時で卵の内容が変わる場合もあるので、2つあってもよい。
- 「全体性の卵」に表した目指す児童の姿が、研究テーマと合っているか、学習指導要領と合っているか、双方から検討していく必要がある。

研究テーマの中にある、「自ら問い、自己選択、自己決定」は学習指導要領得で示されている資質・能力を、より効果的に育むことにつながる能力として位置付けることができる。そのために、自らどのように学んでいるのか、何を学んでいるのか、何のために学んでいるのかという意識を、教師だけでなく、子どもももつことで学びの質や学び方が変わっていった様子が見られた。子どもが見通しをもって学習を進められるように、単元の流れの中で、子どもがどんな問題意識をもつのか、教師がどこで何を指導するのか、選択肢にはどんなこと（もの）があるのかというような、授業場面や子どもの姿を具体的にイメージしておく。そして、子どもが、自身の学習について責任をもち、学習の舵取りを行うことができるように、教師の見通しと環境を整えることが大切である。

そうした実践をした中で学年末の児童アンケートでは、

『自分でめあてを立てて学習に取り組む・・・84.9%』

『どうすれば自分のめあてが達成できるか考えて、学習に取り組んでいる・・・80.9%』

というように、自らの学習をデザインしながら取り組んでいる児童が増えてきている。

5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

「全体性の卵」は、具体的な子どもの姿である。目指す子ども像をベースにして考える教員が多く、ともすると、研究テーマや学習指導要領の内容と外れてしまうことがあった。目標とするものが、ダブルスタンダード、トリプルスタンダードとなり、その教科固有の資質・能力や、単元で大切にしなければならない内容がぼやけてしまい、教科等を通した研究の価値に視点が向きづらいことがあった。

そこで、今後は「全体性の卵」は授業を構想する際に、授業者がクラスの実態からどんな力を育てたいのか、また、どんな授業にチャレンジしたいのか、ということ整理するときの手掛かりとして使うことにした。そして、事前の検討会を2回設定し、1回目は「全体性の卵」の検討会とした。「全体性の卵」と教科固有の資質・能力を照らし合わせ、授業者の思いが実現できるアイデアや、選択肢が増えるアイデアを話し合っていく。2回目は、1回目の検討を基にして書かれた指導案の検討をする。学習指導要領の内容や、教科や単元の特性を踏まえた資質・能力の獲得も念頭に指導計画を立てて、実践をしていきたい。個々の子どもの思考を見取り、思考の深まりの変容を捉え、それを授業の中で生かし、単元を通してどんな力を育てていくのかを見据える力をもっていきたい。そして、単元毎に子どもが自身の成長に気付いたり、教師が価値付けたりしていく授業を探究していきたい。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載、放送された場合は、ご記載ください

- 2021年 東京五輪 チュニジア選手団交流応援 NHK 関東ニュース放送
- 2021年 6学年 VR 京都修学旅行 タウンニュース掲載
- 2021年度 ソニー子ども科学教育プログラム 奨励賞受賞
- 2022年度 ソニー子ども科学教育プログラム 最優秀賞受賞

7. 所感

はじめに、この度は日産財団のご支援により、このような助成の機会を得て、子どもたちの学習環境整備や教材開発をさせていただき、本校の授業研究が一層充実したものになったことに、大変感謝いたします。

本実践は、コロナ禍の真ただ中で、思うように研究が進まないことがありました。しかしそのような状況下でも、教職員の「子どもたちの学びを止めない」、「白幡小学校の研究を止めない」という思いの基、「よりよい授業をしたい」、「子どもたちが成長を実感できる授業をしたい」という熱意をもって、授業改善や研究に取り組み、そのやり方を試行錯誤してきました。限られた授業研究の機会の中で、授業者に最大限にフィードバックできるやり方、参観者も授業者の思いに沿った視点で協議会に参加できるやり方を実践した。出てきた課題については、再度教職員で検討し研究を深めていきたいと思えます。

最後に、本研究について、ご支援・ご助言を賜りました先生方に感謝を申し上げ、所感のまとめといたします。